57

易経，ユングと共時律

権藤　寿昭
ごんどう外科胃腸科クリニック

易経は古代中国において，確立された哲学・占筮の書で，基本は陰陽二要素で，大は宇宙から小は人体までの森羅万象を説く理論体系で，万学の祖とされる．著者は中国古来伝説の天子で，最初に神農と共に登場する伏羲とされ，易の基本・八卦を創ったとされる．時代が下って周王朝開祖・文王が六十四卦（既に，伏羲が創ったとの言い伝えも）を創り，各卦の卦辞（説明）を書いたと伝えられて，更に彼の息子・周公旦が爻辞（六十四卦の各陰陽“爻”の説明）著述．時代が下って，晩年易を好んで熟読した孔子がこれらの経典に注釈文（十翼）を著述・付け加えた．以上の先哲達を並び称し，“易の三聖”とする．更に大きく時代が下って，北宋時代の周敦頤，南宋の朱熹（朱子）といった儒学者達にその原理が展開されていった．一方，本経典の西洋への伝来・受容状況も興味深く無視できない．易経に関しては，ドイツの学者との関わりが多く，哲学者・数学者・思想家のゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ（1646年～1716年）2進法を研究と微積分法の創始者として有名（ニュートンと覇を競った.）彼は中国の古典『易経』にも関心をもっており，1703年，イエズス会宣教師ブーヴェから六十四卦を配列した先天図を送られ，そこに自らが編み出していた2進法の計算術があることに注目した．易経の，西洋語への最初の翻訳はイギリスの伝道会士のレッグの「The Yi King」（1822）があったが，不完全なもので，それに替わってドイツの誇る中国学者リヒャルト・ヴィルヘルム（1873～1930）による完全独訳が，現在その英語への重訳と共に，広く研究者の標準テキストとなっている．一方スイスの精神科医・心理学者．カール・グスタフ・ユング，（Carl Gustav Jung，1875年～1961年）：は，1900年には，ジークムント・フロイトの『夢判断』に触れ，1907年からは親交を開始した．特に当時不治の病とされた統合失調症の解明と治療に一定の光明をもたらし，ヒステリー患者の治療と無意識の解明に力を注いでいたフロイトと，一時親しく意見を交わしたこともあったが，次第にフロイトとの理論的な違いを表に出し始め，1914年には国際精神分析協会（1911年設立し，その初代会長となっていた.）を辞して，フロイトらと袂を分かつことになった．フロイトの元を去ってしばらくしてから（’18年～’20年頃），「自己」が心の発達のゴールであることを，理解し始めた頃に，易経の研究に手を染め始めたことは，広くは知られていない．彼の知的好奇心は，西洋の歴史に伏流するグノーシス主義（2，3世紀に流行した異端的キリスト教の一派），錬金術（ニュートンものめり込んでいた.）のみならず，東洋の哲学にも目を向け始めていた（1920年頃）．20年代の初めごろドイツ国内で，リヒャルト・ヴィルヘルムと会い，’22年チューリッヒの心理クラブで，「易経」について講演をしてもらった．精神科医として1913年以来「患者の精神状態（無意識下），囲の外的・客観的環境の間の奇妙な相関関係」に気付き，“集合的無意識の世界”という仮説を立てたが，アカデミックな心理学領域を超える現象学的問題に直面し，上記のグノーシス主義の文献にしかそれに見合うものを見つけられず，だがそれに完全依拠することもできないという窮地に陥った時に，上記のリヒャルト・ヴィルヘルムとの出会いが，彼に転機を与えた．易経の教義と上記仮説との共通点を見いだし，従来の自然科学上重要な“因果律”ではなく，“共時律”（一定時間内の心的現象と物質現象の一致）の考えを導入した．ユングは，人間の無意識の奥底には人類共通の素地（集合的無意識）が存在し，これらが世界各地の神話・伝承とも一致する点が多いことを見出し，この共通するイメージを想起させる力動を「元型」と名付けた．

今回は，以上，一見まとまりなく，バラバラに提示した感のあるキー・ワードを私なりにまとめて，プレゼンしたいと思う．